
十字路にて

阿武都龍一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十字路にて

【Nコード】

N7192G

【作者名】

阿武都龍一

【あらすじ】

十字路の真ん中で眠る女の子がいた。普通なら通行の邪魔になるはずなのだが、そもそも僕と女の子の周囲には、通行する人も車もない。気味悪くさえ思うその空間内で、しかし僕は十字路の真ん中で眠る女の子の存在から意識を逸らすことが出来なかった。

(前書き)

SSバトル企画 参加作品です。

投票募集期間期間 … 2009年 4月22日～4月29日

企画の説明…

・ 読者参加型の企画です。参加作者は3000字以下のSSを書き、それに対して読者は投票をします。

・ 参加作者は六名。一対一の対戦カードが三試合、すべてタイマンとなります。参加読者の投票権は一組に対して一票。つまりひとりにつき全三票です。

・ 得点の計算は一票につき12点。評価欄に書きこまれた時点で1点。

つまり票を入れると、その時点で書き込んだ(1点)＋一票(2点)で計3点となります。

また票を入れるほどじゃないけど気に入った、という作品があれば評価欄に書き込みを残してもらえば点数に繋がる仕組みです。

・ また、強制ではありませんが投票してくださる読者の方には、出来る限り点数(☆)を入れない感想の形で書き込みをしていただくとありがたいです。

読み手を多く募集する企画として、ランキングに悪影響を与えてはならないだろう、とのご指摘がありましたので、このようなルールを追加しました。

・ 投票基準は

「SSとしてどちらの方が個人的に面白かった(好みだった)か」です。

◎投票は客観意見(批評等の観点)ではなく、主観意見(『自分にとってどれが一番良かった』)でお願いいたします。

・ 投票期間は作品発表から一週間です。

投票期間が終了しましたら、サイトで個人戦の勝者と全体の得票

差による順位も発表したいと思っています。

・投票の形式上、事前の企画参加等の意思表示は必要ありません。
この小説の対戦相手は

「双色」の『告白パラドックス』です。

作品検索は

「SSバトル企画」

「ノンジャンル」からどうぞ。

僕の視線の先で、女の子が眠っていた。

今の季節は夏なので、太陽はガラガラだし、汗はダクダクと溢れてくる。そして、セミの鳴き声がミンミンとやかましい。そんな中で女の子は、十字路の真ん中でスヤスヤと眠っていたのだった。

この女の子は今、とても迷惑なことをしている。何歩譲っても、通行の邪魔だった。特に今のこの時間帯は、僕を含めた通勤や通学中の人や車がたくさん通る……はずである。

しかし今、この場には僕と女の子の二人しかないのだ。いくら周囲を見回してみても、誰もいないし車もない。ただ、セミの声が耳をつんざくばかりだった。

この状況に気がつくと、僕はとても気味が悪くなった。しかし、それでも僕が逃げ出さなかったのは、十字路に眠る女の子が、僕の意識をあまりにも引き付けたからだだった。

しばらくして、前触れもなく女の子が目を覚ました。

起き上がる際に、肩口の辺りまで伸びた髪がなびく。地面で眠っていたにも関わらず、その髪は痛むどころか、幼子のそれのような美しさをさえ連想させた。

女の子の服装は黒のワンピースで、右手には黒の手提げカバンが握られている。何とも大人びた格好だが、佇まいから中学に入りたての年頃だろうと推測した。それでも、その格好が女の子にとって、これ以上なく似つかわしく思えた。

突然、女の子はこちらに身体を向けた。自然と、その子の視線が僕とちか合う。

女の子は、穏やかな微笑みを僕に向けた。

——こんにちは。

不意を突かれた僕は、その子の単純なあいさつを返すのにさえ一苦労であった。意味不明に噴出してしまふ赤面をぶら下げながら、

「ど、どうも」と萎縮した一礼をする。そんな僕の姿を見た女の子は、おかしそうにクスクスと笑った。僕の顔はますます赤くなった。女の子の発した声はセミの声と比べるまでもなく小さく、僕とその子の距離感で会話を成立させるには、例えセミの声がなかったとしても心もとないものだった。しかし不思議なことに、その子の言葉は僕にはっきりと伝わった。

——今日は良い日ですね。

要領を得ない言葉を女の子が言う。それに対して僕は「は、はあ」と、間の抜けた返事しか出来なかった。

——うん。今日は良い日です。

しかし女の子は、この言葉の意図を自己完結したようだった。

しばらく、何かを考えるような表情を浮かべていた女の子だったが、やがて思い立ったように黒いバックの中を探り始めた。

しばらくして女の子は、バックからハガキサイズの黄色い箱を取り出した。一瞬の逡巡の後、それがある食べ物箱であることに気がついた。

——やっぱり朝はこれですよ。これの、チーズ味ですよ。

やはり自己完結している言葉を呟いた後、その子はその食べ物——カロリーメイトのチーズ味を食べ始めた。女の子はポリポリと、まるでハムスターのようにそれを食べる。租借し、それを飲み込む時のその子は、まるで幸せを噛み締めるような笑顔を浮かべているのであった。

一本を食べ終わり、もう一本に手をつけようとしたところで再び目が合う。

女の子は自分の身を隠すくらいの必死さで、カロリーメイトを隠す。

——上げないですよ？

そんなつもりはないです、と言う気にはなれなかった。女の子は僕のことを割と本気で警戒しているらしく、しばらく僕のことをジイトと、しかし微笑ましさを覚える程度の迫力で睨んだ。

やがて全部食べ終わると、女の子は大きく体を伸ばして、それから僕の方を見た。とても対外的な微笑を、その子は僕に向けた。

「良い日なので、行ってきます」

はつきりとそう言うと、女の子は太陽の方へ体を向ける。そして一歩、太陽の方に向けて足を踏み出した。

女の子はゆっくりと、しかし確かな足取りで、太陽に向かって虚空を歩いていく。まるで、不可視の階段を昇るように。

女の子が、少しずつ小さくなって行く。僕は、その様子をただ黙って見守ること以外にすることなど、何も思いつかなかった。少しずつ点になっていったその子は、やがて最後には視界の外に消えて行った。

ボウっと、僕はその子が消えていった空を見上げる。しかしそこには、ただその子がそこを歩いていったのだという事実しか映し出していない

「——こうすけえええ!!」

何の前触れもなく、僕の鼓膜にとんでもない大音量が飛び込んできた。本気で心臓が飛び出そうになりながらも、僕は音のした方に振り返る。

そこには、眉を吊り上げて僕を睨みつけるポニーテールの女——僕の喧嘩仲間である吉村遠子が仁王立ちをしていた。何だか良く分からないが、とても怒ってるようだ。

しかし、むしろ僕の方が先ほどの遠子の所業に対して腹を立てていたので、

「なんだよ遠子！ 何を僕の耳に奇襲攻撃を……!!」

と、当然の文句を言っている僕の口を、遠子は僕の耳を容赦なく引っ張ることによって強制的に止める。言葉の変わりに「いてて止める止めろって耳ががが！」と悲鳴を上げる僕を無視して、

「はあ？ 奇襲攻撃？ あんたどの面下げてそんなこと言ってるの

よ！」

「ががが……へ？」

遠子の言葉を怪訝に思った僕は、「何言ってるの、遠子？」と問い返すと、「はあ？」の一言と共に再び耳を引っ張られれれ！」

「それはこっちのセリフよ！ 私はさっきからずっとあんたに声かけてたんだから！」

「……え？」

——さっきからずっと？

「いやお前、マジで何を……」

その時、突如として車のエンジン音と人々の雑踏が聞こえてきた。驚いて道路を見ると、そこにはいつもの通勤通学の風景が広がっていた。人が歩き車が走る、そんな風景。

一瞬、頭の中が真っ白になる。

「ねえコースケ、あんたちよつと大丈夫？」

遠子が真顔で聞いてくる。僕の尋常じゃない様子を察したらしい。僕は、先ほどの出来事をすごく話したかった。

十字路で眠っていた女の子と、その間消えていた人と車……。

「……悪かったよ。気づかなかったんだ。ボケつとしてて」

しかし、止めた。こんなことを話しても、遠子をますます心配させるだけだ。青く点灯した信号を見て、僕は横断歩道を渡り出す。

しかし、こんなことを言ったところでやはり、「ちょ、待ちなさいよ！ あんた、何かあったんじゃないの？ ねえ？」と食いついてくる。うっとうしくなった僕は振り返り、

「っせえな！ 僕の脳内彼女が一人マラソン大会をするって言うから、それを温かく見届けてただけだったっの！」

と、半分の嘘と半分の適当を織り交ぜた言葉でごまかそうと試みた。

遠子はそんな僕を、まるでゴキブリを見るような目で見た。

「……言いたいことはそれだけ？」

「とりあえず、右の手刀をちらつかせながらこっちに近寄るのはよ

そうか」

「心配しないで。これからあんたはとても痛い目に合うけれども、もしそれを奇跡的に乗り越えられれば、元の普通に馬鹿だったところのあんたに戻るから——多分」

「そんなハイリスクノーリターンお断りですう！」

「問答無用！ 待て！」

こうして僕は、殺気を全開にだした遠子を相手に、全力疾走三分のところに位置する高校まで命がけのチェイスをする羽目になったのであった。

この時僕は、女の子の顔を思い出そうとしたが、どうしても思い出せなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7192g/>

十字路にて

2010年10月8日15時11分発行